

教育実習事後指導に対する参加者の評価 (2)*

—自由記述によるグループ・ワークの効果分析—

吉田 道雄

The Effects of Group Work of the Post-training for Student-teachers (2)

Michio YOSHIDA

(Received October 4, 2004)

熊本大学教育学部附属実践研究指導センターでは1989年に、教育実習事前指導の一環としてグループ・ワークを導入した。その概要と成果については、吉田(1992)、吉田・吉山(1997)によって報告されている。この教育実習事後指導は1998年度まで10年間にわたって実施された。その後、1999年度に至って、このコースは4年次事後指導として行われることになった。これについても、吉田・吉山(2001, 2002)が、その一連の効果を検討している。こうした研究を踏まえて、吉田(2004)は、事後指導終了時点での参加者たちの自由記述を分析している。それによって、これまでとは異なる視点から教育実習事後指導の効果が明らかにされると考えたからである。本稿では、そこで取り上げることができなかった自由記述について、引き続き検討を行う。

自由記述とその分析

ここで対象にする自由記述は2003年度に実施した「熊本大学教育学部教育実習事後指導」のうち、「グループワーク」に出席した学生から得られたものである。本コースは熊本大学教育学部附属教育実践総合センターが企画・実施する「教育実習事後指導」4コースのうちの一つである。コースは1日のスケジュールで、6月21日、22日の2回にわたって開催された。コースの内容については、吉田・吉山(2001)を参照されたい。スケジュールは大きく二つのパートに分けられる。まず最初に参加者がお互いを知るウォーミングアップを行う。その後、実習を行った熊本大学教育学部附属小学校・中学校生徒の声を分析する。後者は、児童・生徒が、「実習生の先生でよかったと思うこと」「実習生の先生にもっとして欲しかったこと」について自由に回答したカードを使用する。この部分が「グループワーク」の中心的な課題になる。参加者数は2コースの合計で79名である。なお、30名の自由記述については、すでに吉田(2004)で報告している。また、実習生の記述は明らかな誤字などを除いて、原文のまま掲載することにした。

1. 子どもたちの声を知って、求める教師像についての講話を聞くより、ずっと説得力があるように感じた。注意をしっかりとしてほしいとか、授業中に自分たちの意見や質問を取り入れてくれたのがよかったと言う声は特に心に残った。ただ、一番多く実習に行ったのが小学校だったので、できれば小学生の声について考えてみたかった。またほめるためには、自分がほめられる人でなければならないという話は一番印象に残っている。本当にその通りだと思う。実習校の子どもたちから、明るくて優しいなと思った。丁寧におしえてくれてうれしかったなどの評価をもらったので、そのことを励みに子どもたちの気持ちが良くなる。子どもたちから尊敬される先生を目指そうと思った。

「講話」よりも子どもたちの「生の声」のインパクトが大きいことが分かる。それが、今後の意欲に繋がって

* 熊本大学教育学部附属教育実践総合センター：860-0081 熊本市京町本丁5番12号

いる点が、「グループワーク」の効果だと言える。熊本大学では、3年次に附属学校へ実習に出かける。4年次になってからは、小学校課程の学生は附属中学校へ、中学校課程の学生は附属小学校へ出かける。いわゆる副免のための実習である。その後に熊本市内の公立学校で教育実習が行われる。それらを終えてから行われるのが「教育実習事後指導」である。このコースで提示した「子どもたちの声」は、副免実習直後に収集されている。そのために、「一番多く実習に行ったのが小学校だったので、できれば小学生の声」が聞きたかったという気持ちになっているのである。その希望は十分に理解できるが、附属学校での実習が3年次であるため、その時点での「子どもの声」も、「事後指導」時には「遠い過去」のものになってしまう。そうしたことから、現時点では、子どもたちについての記憶が維持されている副免実習時の「子どもの声」を聞くことにしているのである。印象に残った「ほめることが効果を持つには、自分自身がほめられる必要がある」という話は、「グループワーク」の中で提供した話題である(吉田, 2001)。

2. 今日グループワークをしたが、自己紹介や話し合う時間をたくさん入れてあったために、初めてしゃべった人ともスムーズに活動することができたように思う。午後からは「子どもたちが、実習生をどうみていたのか」のデータをみて子どもたちはしっかり私たち実習生の姿を見ているなあと考えた。中学一年にもなると、厳しい意見などもあったが、中学生の生の意見が聞けてよかったと思う。授業がおもしろい、おもしろくないというのは、授業中にどれくらい生徒が活躍できるかなのではないかと思った。今後人前で立ってプレゼンテーションをするときは、声の大きさ、文字の大きさ、態度などに注意して、聞いてくれる人の立場に立ってやりたいと思った。

この学生にとっては、授業における「参加」の重要性を認識したことが事後指導で得られた最大の成果だろう。そのこと自身が、われわれ指導者側の「講話」ではなく、「生徒の声」から理解した点が重要である。本人は気づいていないかもしれないが、それそのものが「参加的」な体験から得られているのである。ところで、今日では「参加」に代わって「参画」ということばが使われるようになった。その代表例が「男女共同(働)参画社会」である。「参加」は「加わる」という意味がやや消極的なニュアンスを持っているため、「その場にいる」ことも含んでいるように感じられる。「枯れ木も山のにぎわい」というが、その「枯れ木」も「参加」の範囲に入ると考える立場もある。これに対して、「参画」は、「画」が「計画」や「企画」、あるいは「画策」などの中で使われることもあり、より「積極的」な意味合いを帯びている。そこで、「参画」が好んで用いられるようになったと思われる。そうした状況のために、一般には「参画」が比較的新しいことばであると認識されているようだ。しかし、この「参画」という表現が生まれたのは、それほど新しいことばではない。たとえば、三菱重工(株)長崎造船所は、かつて小集団活動をとおして災害事故を減少させようと職場運動を起こしたことがある。その成果をまとめたスライドのタイトルは「全員参画による安全運動の実践」である。この運動が展開されたのは1970年前後のことである。「参画」ということばの歴史は古いのである。

3. まず、グループで活動することができたことが、とても楽しかったです。本来は養学専なので、明日受けるはずだったのですが、サークルの行事と重なったため、変更していただきました。同じ学科の人が一人もいなかったのも、最初は不安でしたが、話したことのなかった人といろんな話ができ、附属中や協力校(小・中)の話の聞くことができ、今日のこの時間は本当に貴重なものだったと感じました。子どもたちの声を読んで、まず思ったことは「すごいな」ということです。授業に関しても休み時間や給食・掃除時間に関しても、本当に細かい生徒のチェックが入っていて、時には胸にささるような声もあったけれど、それだけ私たち教生を一人の先生として見てくれていたのだとわかり、子どもに対してありがたいという気持ちでいっぱいになりました。子どもと接する中で考えさせられること、学ぶことはたくさんあるけれど、こうやって実際に子どもの意見を知る、ということは教師を目指す私たちにとって、とても重要な体験だったと思います。とても勉強になりました。

個人的な事情から、同じ学科の学生が参加する日に出席できなかった学生である。しかし、その結果として、日頃は接触することの少ない者たちとコミュニケーションができたことを評価している。こうした見方ができること自身が学生にとっても成長に繋がる。集団の活力の源泉は、その多様性にある。教育実習のまとめとして、

学科を超えた関わりが提供されることの重要性が、学生の声を通して改めて確認されたということが出来る。

4. とにかく楽しくて、充実した一日でした。グループのメンバーとは、初めはぎこちなかったのですが、様々な活動を通して、素直な気持ちを出せるようになったことがうれしかったです。他の人の意見や考えは自分とは当然違うので、良い刺激になりました。一人で考えることの何十倍も大きなものを得たように思います。それに自分の話をグループのメンバー全員が真剣に聞いてくれたこともとても嬉しかったです。印象に残ったことは最後の方の「子どもたちの声」を見て、それをまとめたことです。実習での課題は自分が思っていたことの他に自分ではあまり重要ではないと思っていたことも「子どもたちの声」から気づき、新たに考えていかなければならないなと思いました。さらにその声をグループでああだこうだと考えることが楽しく、一つの「もの」として作りあげられたことに、達成感を感じています。

「自分と違う意見や考え方」を「刺激」と受け止めている点が評価できる。こうした体験が、さらに多様な意見を受け容れる行動に繋がっていけば、人間的にも成長していくだろう。それと同時に自分の意見も聞いてもらえたことに喜びを感じている。他人の意見を受け容れるのは、自分の考えも受け入れられるからである。グループ・ワークではこうした雰囲気がつくれるように配慮されている。この学生の声は、そうした状況の設定が機能していることを明らかにしている。

5. 第一印象を書いてももらった時に他の人は自分のことをこんな風に思っているんだなと思いました。自分の嫌いな面、本当の自分とは逆の部分を見せようとしているということに気づきました。子どもたちの声は本当によかったです。今日まで気づかなかったことがありました。大人の書くスピードと子どもの書くスピードが違うということを忘れていました。こういうことを考えることが、子どもの視点に立つということだと改めて感じました。私はグループ活動に対して苦手意識がありましたが、自分が積極的に取り組むことができたので、今日は本当に楽しかったです。何でも自分次第だなと思いました。

「第一印象」は、プログラムのはじめに導入した「自分を知らせる」セッションで得られたものである。それは単なる「自己紹介」を超えたもので、コミュニケーション・スキル向上を目的にしている。その内容についての詳細は吉田（1992）を参照されたい。ここでは「自分」を再発見できたことが大きな成果だと認識している。「何でも自分次第」という気持ちが、その後の実生活や社会での行動に繋がっていくことを期待したい。子どもの視点に感動を覚える点は、ほぼ全員に共通したものである。

6. 実習後は自分たちで授業に対する反省をしていたけれど、子どもたち・生徒の私たちに対する感想・意見を実際に読むことで実習の反省も大きく変化した。例えばワークシートを用いたり板書の時間を削減するためにたくさん黒板に事前に準備したことをはったりしていたことが、生徒にとっては何が重要な部分なのか区別がつかないという印象をもつかんだということも改めて知ることができた。今日の事後指導は協力校の前にあるともっと今日学んだ反省・課題を生かすことができるのではないかと思った。グループで意見を交換することができて人の意見も聞け勉強になった。

自分たちが工夫して準備したワークシートなども、その意図が児童・生徒に伝わらないことを感じている。この点の気づきは実習生にとってきわめて重要だと思われる。こうした気持ちになったのも、子どもたちの「生の声」として提示されたことが大きく影響している。個々の実習についての情報を持っていないわれわれの発言とは異なり、児童・生徒の声は、はるかに迫力があると感じられたはずである。

7. 全く名前も顔も知らない方と最初にグループを組んで、うまく活動できるのか緊張しましたが、自己紹介をゲーム感覚で楽しくすることができホッとしました。今日の自己紹介のやり方だと、名前を何度も復唱するの

で、より早く名前を覚えられると思いますので、実際、今後教師になってからこの方法を使わせていただきます。午後は附属小・中の子どもの生の声を聞く（読む）ことができ、とてもよい機会になりました。このように事前に調査をしていただくことを心から感謝しています。子どもたちの声を聞き、思ったことはたくさんありますが、やはり自分が精一杯授業の準備をして臨めば、子どもたちはきちんと反応を返してくれるということがわかったので、これからも全力で子どもにぶつかっていきこうと改めて決意しました。

参加者の多くに見られる標準的な内容である。ただ、この学生の場合は、子どもの声を自分たちの行動に対する前向きな反応だと捉えている。ややもすると、子どもたちの目は「厳しい」とか「気づかないところもよく見ている」といった内容のものが多い。これは、学生たちが子どもたちを評価者として見ていることを示している。ここに挙げた回答も子どもを評価者として認識しながらも、学生の行動に応じてくれる反応者として子どもを見る姿勢が認められる。そのことで、「自分もやればできる」という積極的な気持ちが生まれているのである。このような見方を養成することも、この種の研修では重要なポイントになることが分かる。

8. お互いのことから始まった事後指導ですが、相手を知ることから人間関係は始まっているので、何事においても大切だと思った。生徒から出された一つ一つの意見は重く感じられました。私たちの一つ一つの行動が生徒に影響を与えている事を感じ、その怖さと、だからこそ生徒に指導していけるという希望も感じました。4年間で教育実習、病院実習を経て人間的にも成長し、生徒の前に立っても恥ずかしくないようにも思いますが、生徒の見本となるためにもっと人間的な広がりが必要だと感じました。自分自身での振り返りと他人から見た自分の姿は異なるので、今日は良い体験をしたと思います。

このコースは「自分を知らせる、他人を知る、そして自分を知る」とのタイトルをつけたグループ・ワークから始まる。その中で互いに自分の情報を伝え合う。それを元に、それぞれの印象をカード書いて交換する時間を設けている。渡されたカードには、自分自身が認識していなかったようなことも書かれている。そのことで、他人の目に映った自分のイメージを確認することができるのである。この学生はそうした試みを通して、自分がどう見られているかを知ったことに満足感を覚えているようだ。これもまた、グループで行う活動ゆえの成果である。

9. 生徒たち一人一人の声を実際に見ることができて、とても良かった。自分のなかで、こうだっただろう。ああ思っていたんじゃないだろうかと考えるよりも、具体的で自分の実習の反省がしやすかった。やはり生徒がとてもよく見ているということがわかったし、十人十色の感じ方を一つの物事に対してもしているなあと感じた。事実一人一人違う personality を持っているというのが現実であって、そういった環境の中で教師はどう対応していくのか、どう教育者としてあるべきかを考えさせられた。事後指導ということで、また長い話を何時間も聞くのだろうと肩を落としていたが、参加してみてもとても具体的なステップで実習の振り返りができたので本当によかったです。ありがとうございました。

生の声を「見る」ことを高く評価している。この点は、参加者に共通している。この学生の場合、「グループ・ワーク」を「長い時間話を聞く」ものと予想していたようだ。実際には、実習の振り返りなどをグループ討議を中心に進めたため、結果としてはコースに参加したことに満足している。学生にはコースの内容を事前に知らせてはいるが、それはあくまで概略で、詳細な情報は含まれていない。しかし、そうかといって事細かに内容を知らせることで効果が上がるとも思われない。「グループ・ワーク」はダイナミックなものであり、その動きによってプログラムそのものの内容も臨機応変に変えていくからである。いわゆる「シラバス」的なものを準備して、それに忠実に進めることになれば、その時点で「グループ」は「ワーク」しなくなる。

10. 生徒に書いてもらった意見が、本当に授業のことばかりで驚いた。ただこれを読んで、正直少し落ち込んだ。こちらはみんなに平等に接しているつもりでも、やはり子どもの方から見ればよく実習生に話しかけてくる

子をひいきしているように感じているのかもしれない。その点は本当に難しい。授業についてはこれから養われていく部分もあると思うし、生徒との接し方も経験が物を言う部分があると思う。今日の意見を参考に今自分にできることは明るく楽しく頑張っていくことだと感じた。これから今日出た様々な反省点に気をつけつつ成長していきたい。今日の講座は確かに自分を振り返るという面で大変役に立ったが、それよりお話をされた先生方の考え方がすばらしくてそのことが一番勉強になった。こんなに笑いのあふれた講習会だとは思ってもみなかった。大変楽しかった。楽しく学びのある授業というのは私の理想なので、参考にさせていただきたい。

「自分の思った通りには通じない」。これは教育実習生に限らず、あらゆる対人関係に伴う課題である。ここで重要なことは、その事実を受け止め、少しでもズレを埋めていく努力をすることにある。相手の見方を否定するだけでは事態は変わらない。そこで有効な方法は「自分が変わる」ことである。この学生のレポートには、そうした気持ちが表れている。また、コースを担当したわれわれに対しても一定の評価をしている。児童・生徒からの生の声を提示することもある。可能な限りリラックスした雰囲気をつくるための演出にも心懸けている。さらに、「自分たちが参画している」という意識も高まるようなスケジュールでもある。こうしたことが、担当者に対する好意的な評価に結びついただけと思われる。

11. 他学科の人の実習内容（自信がついたこと、困ったこと等）を聞くことができて本当に良かったと思う。どうしても他学科の情報を知る機会は少ないので、勉強になった。また、午後からは「子どもたちの声」ということで私たち教育実習生に対する意見（良かった点、反省する点）を知ることができた。このことは今後教職についた時に大きく役立つものになるのではないかと思う。子どもは私たちのことを非常によく見ているので、私たちの言動、態度には十分気を付ける必要があるなど感じた。また一人一人受け止め方や感じ方が異なるので、その辺の配慮が必要になってくるのだと思った。

多くの学生から「他学科」というキーワードが聞かれる。同じ学部であっても専攻課程が違えばコミュニケーションの機会は少ない。そんな状況の中で「教師を目指す」という共通の目的を持っている者同士が「自信がついたこと、困ったこと」について語り合う。そのことは、彼らの今後の成長にとって望ましい影響を与えたいと思われる。子供の反応についても、個々の受け止め方や感じ方の違いに気づいている。それは、一時的にはこの学生の個人的な感受性による解釈である。しかし、「グループ・ワーク」における彼らの様子を見てみると、それは、グループ・メンバーとのディスカッションによって認識された結果だということも分かる。ここに、「グループ・ワーク」を導入する意義がある。

12. 悩んでいることは他の人も同じということで安心ができた。また生徒たちの生の意見が聞けて本当に良かった。生徒たちは私たちを本当によく見ているなど思った。一般的に教生への意見ということだったが、やはり自分が行った際の意見を聞きたかった。担当学生でのグループ分けで、全く知らない人と話、仲良くなれたこともよかった。今後も情報交換などができたらいいと思う。生徒たちの意見は厳しいものもたくさんあったが、反省させられる点も多くあったし、気づかなかったことも知ることができてよかった。今日の始めの自己紹介やイメージのやりとりとか楽しく仲良くなれる方法でよかった。

附属小中学校の児童・生徒からの回答は、5月に行われた実習をベースにしている。1クラス当たりの配当数も多く、児童・生徒に特定の実習生を指定して回答を求めることは困難である。回答結果は学年とクラスが特定された封筒に入れられている。したがって、本コースの参加者たちは、自分が担当したクラスの回答であることは確認できる。しかし、それが「自分に対する回答」であるかどうかは分からない。そこで、ここに書かれたような要望が出されたのだろう。それは、より積極的に自分の評価を得たいという気持ちの現れであり、その姿勢を評価することができる。

13. 今日は附属小学校での実習の反省を子どもたちの声から振り返ることができた。他学科の教生からもいろ

いろな話を聞くことができ、貴重な体験ができた。自信が持てたことの発表では、少し困った。自信が持てたことがあまりなかったからだ。他の教生の発表を聞いて、うらやましく思えた。講師のお話は、今日初めて聞いたが、まず人柄が素敵だと思った。私はよく人に、楽観的と言われるが、先生は生きることの全てを楽しく、出会うもの全てに感動しておられるように感じた。教師一人一人、個性は当然あるもので、明るい人もいればそうでない人もいる。しかし、生徒にとってはどちらが楽しく一日を過ごせるかという、前者だと思う。「自分が少し変わるだけで世界の見え方も変わってくる。」という言葉が印象的だった。

事後指導を担当したわれわれに対する評価が入っている。1日という制限された時間であり、正当な人物評価はむずかしい。しかし、学生に対する教員側の態度も時々刻々と評価されていることを意識する必要がある。それは当然のことであるが、こうして書かれることで再認識することができる。事後指導プログラムの内容的な検討だけでなく、それを実施するわれわれの働きかけのあり方についても考えていくことが求められている。いわば、教師そのものがコンテンツと並んでソフトウェアなのである。

14. 自分自身の実習での態度、指導、支援について振り返ることができました。実際に生徒の本音を聞くことができたことはとても印象のこり、一言一言がとても重く感じました。またグループディスカッションによって他の人の意見を聞くことができとても勉強になりました。一人一人異なった視点から感じたことを聞くことができ、また発達段階に応じた子どもの据え方、そしてその人の考え方を聞くことができたので、自分の視野を広げられたように思います。またグループ活動によってグループのメンバーとも仲良くなれてよかったと思います。今まで経験したグループ活動とは全くことなり、より深い部分でお互いのことを理解し、そして話し合い、活動を行うことができたと思います。本当にこの事後指導に参加できよかったです。

多くの学生が集団で何かをした体験は持っているだろう。しかし、ここでのグループ活動では、より深い相互理解ができたと感じている。これは、コースの流れが設計どおりに機能したことを示している。まずは、導入段階で対人関係スキルの向上を目指したウォーミングアップを行う。これによって、お互いが自由な雰囲気の中でコミュニケーションが取れるようにする。その上で自分たちが関わった児童・生徒の生の声を聞くのである。その時点では、厳しい指摘も含めてみんなで受け止めようという気持ちが共通に高まっているのである。グループで子どもたちが書いたカードをまとめる際にも、全員が立ち上がる光景も見られる。こうした目に見える反応からも、参加者たちの意識の高まりが伝わってくるのである。

15. 私は名前を覚えるのが不得意ですけど、今日の名前送りではすぐに覚えることができ、これからいろんな機会に使わせていただこうと思いました。私は高校にしか行ってないのですが、グループの人の話を聞いて、附属小・中と公立小・中では大きな差があるのだなと思いました。附属の児童・生徒はたくさんの実習生と接してきただけあって、とてもよく実習生のことを見て、いろんなことを感じているのだなと思いました。実習中、クラスの雰囲気作りの難しさを実感しましたが、笑顔で接することが大切だと感じました。

附属学校と公立学校の児童・生徒との違いを感じている。たしかに、附属学校では教育実習生が頻繁にやってくる。その実習生たちが行う授業数も多い。そんなことから、教育実習生に対する評価も公立諸学校の児童・生徒と比較すると馴れていることは確かである。ここで重要なことは、そうした「目」から見た自分たちの行動に対する評価を真摯に受け止めることである。さらに、その結果をもとにして、行動を変える気持ちを高めていくことが、このコースの目的でもある。その点では、こうした回答は、「グループ・ワーク」が所期の目的を達成していることを示唆していると言えるだろう。

16. 今日はグループでの自己紹介の仕方など自分が教師になった時などに使える方法だと思った。久々にクレヨンなどを使って童心に返り楽しかった。附属中の子どもたちの感想などは厳しくもありとてもうれしくもあり、励みになった。同じ実習生がしたことを自分のこととして受け止め反省したいと思った。私の実習先の子どもた

ちはどう思ってくれていたのか、今度手紙を書いて聞いてみたいと思った。他の人の実習で感じたことは自分も感じていたり気づかなかったりしていて色々考えさせられたが、普段話すことのない人たちとグループになって楽しかった。

事後指導に参加する学生には、附属小中学校での実習を行っていない者もいる。この学生はその一人であるが、子どもたちの生の声を自分に対するもののように受け止めている。その結果が、自分が出かけた実習先の子どもへ手紙を書こうという気持ちになって表れている。このあと、実際に手紙を出したかどうか確認していないが、こうした気持ちを起こさせている点で、「グループ・ワーク」は参加者にとって有効な体験になっていると考えられる。

17. 自己紹介の仕方から工夫しており、一日楽しく時間があつという間という感じで過ごすことができた。児童・生徒の意見や実習の感想など人それぞれで、自分の考えになかった考えを聞くことができてもためになったと思う。また自分の課題や実習先で悩んだことを他の人も同じように悩んでいたこともわかり、少し安心することができた。また生徒・児童の意見も予想と違ったりすることもあり驚きがあったが、素直な意見であると思うので、これから自分の考えに取り入れてどのようにすれば児童・生徒はそう思わないのかを考えたいと思う。良い点はさらによくするように自分なりに工夫し、常に向上心を持ち続けたい。

等質集団よりも異質集団の方が生産性に優れている。これは、集団を研究対象にするグループ・ダイナミックスでは定着した見解である。ここでは、とくに「自分の考えになかった」ことを「聞くことができた」点が強調されている。意見の内容だけでなく、こうした体験を通して、「さまざまな人」と関わり合うことの重要性を実感することが、今後の成長に生かされるだろう。それと同時に、他の仲間も「同じ悩み」を抱えていることを知り安心感を持っていることも見逃せない。もともと現場体験の少ない実習生が悩み困惑するのは当然のことである。それによって将来に不安を感じすぎる事態は避ける必要がある。こうした悩みを共有化しながら、それを克服するために工夫していこうという前向きの気持ちになることが重要なのである。

18. 「子どもの声」や先生方の話を聞いて教師の生徒に与える影響は大きいのだと改めて思った。だから私は辛くても「いつも元気で明るい」先生でいたい。そしてクラスの雰囲気明るくし盛り上げたいと思う。この講座では、他者から見る「自分」を知ることができ、人やモノの見方はいろいろあるのだなと思った。7人でのグループ活動で私に対するイメージはさまざまだった。それなら子どもたちの感じる「私」のイメージもたくさんあるだろう。全員に好かれる教師になることは無理だと思うが、6割の子どもに好かれお互い信頼できる関係を築きたいと思う。

「グループ・ワーク」では、メンバー同士の「イメージ」についても情報交換をする。わずかな時間を使ってコミュニケーションをただけであるから、「イメージ」の的確さについては必ずしも保証できるわけではない。しかし、こうした作業を通して、「人によって他人に対する見方が違う」ことを体感するのである。それがその後の自分の行動全般を変化させようという意欲に結びつくことを期待している。しかも、完璧を求めるのではなく6割の子どもとの信頼関係を目指すとしている点も、現実的な目標設定が行われていると見ることができる。

19. 初めの自己紹介は良かったと思います。相手を深く知ろうとする時、やはり名前を知ることがまず第一歩だと思うからです。次に、子どもの声をまとめる作業です。実習中知ることのできなかつた子どもの本音が聞けてうれしさと驚きに包まれました。特に「厳しくてよかった」との意見には、びっくりしました。子どもからみると教生でも「先生」なので、自覚を持って物事を判断し、悪いときは悪いと言うことも大切だと改めて感じました。また笑顔とは本当に素敵なお顔だと知りました。最後にアンケートは自分の行動を振り返ることができ、さらに自分を見つめるということで、良かったと思いました。先生方の話もおもしろく参考になりました。ありがとうございました。

多くの学生たちが児童・生徒の声に感動する。その中でも、自分が想像していなかった指摘に出会うと、ストレートに驚くことができる。これが学生たちの柔軟性であり、その力を生かすことでさらに成長していくことが期待できる。とくに、「もっと厳しく」「叱るべきときにはちゃんと叱って」といった内容は一様に強いインパクトを与えている。この点は、児童・生徒の生の声を取り入れた最大の効果である。「アンケート」とあるのは、コース終了時に設定する行動目標のことである。事後指導で分析し、学習したことを生かすために、今後どのような行動を取るか、それを個々人で決めるのである。この時点では採用試験も受けておらず、しかも翌年に教師になった際にどのような行動を目標にするかを決めるのは無理がある。しかし、コースが終了した直後の生活における目標を考えるのも、事後指導の目的と合致しない部分もある。この学生は、「アンケート」も振り返りに役立ったと評価しているが、プログラムを設計する立場からは、内容についての検討を行うべきだと認識している。

20. グループワークとして初めに3ポイントの自己紹介をしたことによって、よりグループの相手のことを知れたように思える。また他人に写った私を通して自分というものが他人にどのように見られているかを知ることができ本当におもしろかった。また実習を改めて振り返りお互いの意見交換などができた点でも本当によりよいグループワークができたと思います。子ども・生徒の生の声を知って、実習で頑張ってたかったなと思う点や反省点が見えてきました。その中で強く感じたのは自分の一生懸命さは必ず子ども・生徒に伝わっていること。教生も子ども・生徒にとっては先生と言われる立場にあることを自覚し、また見られているという意識のもとに、模範となるような行動をしなければならないということを強く感じました。

これまでに見た内容と同列のものである。ただ、自分が一生懸命に努力すれば、それが児童・生徒に伝わることを実感している点で、本コースの効果の一端を示している。行動の変容には、ある意味での成功体験が欠かせない。この学生の場合は、「努力は報われる」ことを実感している。そのこと自身が有る種の成功体験と考えることができるだろう。

21. 最初の自己紹介は今までにしたことのない自己紹介でしたが、すごくよかったです。すぐ名前を覚えられたし、一人一人の個性がよくわかったと思います。子どもたちの声に対する反省ではみんなの意見を聞くことができてよかったです。一人一人視点が違って、色々気づかされました。特に「子どもたちの声をうのみにせず、自分で吟味しなおして100%でなく、少しずつ変えていく」という意見に納得しました。最後に先生方お二人がユニークでとても親しみを覚えました。楽しくてあっという間に時間が過ぎたように思います。ありがとうございました。

児童・生徒の生の声は、それだけで圧倒的な迫力を持っている。そのことは、ほとんどの学生が「子どもの声」について触れていることから明らかである。そうであるだけに、それに対する認識についても触れておく必要がある。ここで出された児童・生徒の声は、あくまで子どもたちの目で見えた実習生の姿である。したがって、「指摘された」内容は子どもにとって事実ではあるが、その「見方」や「指摘」をすべて「受け入れるべき」ものであるとは限らない。あくまで自分の視点から見直して、課題だと考える行動を改善していけばいいのである。子どもの声を、ただひたすら「ご無理ごもっとも」と受容するのでは意味がない。講話ではこうした点も強調したのだが、この回答はその意図が理解されていたことを伝えている。

22. ほとんどが初対面の人というメンバーの中で、うまくグループ活動ができるのか心配でしたが、自己紹介をゲーム感覚で行ったことで、緊張がほぐれました。リラックスできたということで、その後の作業もとても楽しく行うことができたと思います。また子どもたちの意見を聞くことができ自分の視野の狭さを改めて痛感しました。実習最終日にももらった手紙の中でも、目立つ子に隠れてしまいあまり話すことができなかったという意見もあり、日頃から一人一人の子どもを見る視点を養わなければならないと思います。今日の講座の中で最も印象に残った

のは、一つのことでも、プラス・マイナス両方考え方があるということです。私は研究授業でリフレーミングを取り入れ短所を長所へと据え直してもらおうと指導しました。しかし私自身ができていないように思います。言葉と行動が一致するよう、日頃からプラス思考を心がけるようにしたいです。

視点の転換は行動の改善にとって欠かせない。事後指導では、「ものごとを複数の観点から見ること」の重要性について事例を交えながら強調した。それにあわせて、同じ体験をした学生同士の議論の中で、「ものの見方」が違うことも実感したと思われる。「グループ・ワーク」コースの効果は、こうした講話などによって提供される情報と生のディスカッションの相互作用の中から生まれる。それは、ただ単に聞いただけの知識ではなく、また話し合っただけの記憶でもない。「グループ・ワーク」の設計に当たっては、こうした組み合わせをより適切に考えていくことが重要なのである。

23. 今日はとても楽しく、またためになったので長い一日はあっという間に過ぎてしまった。先生方の話も聞きやすく、笑いもあり、全然眠くならなかった。一番印象に残ったというかショックだったのは、生徒の本音だった。自分のクラスの声を聞くとこれは私のことを言っているんだろなあというのはいくつもあった(△の点で)。改善しなければならない点は多くある。ただ生徒の声はとても抽象的なものが多く、その子がどの点について、どのような意図で書いているのかわからないので、せつかく生徒の声を聞くなら、もう少し項目を分けたりして、誰が読んでも理解できるようなものにしてほしい。そうしなければ実習生への心的ダメージはかなりのものになるかと・・・思われます。

(「先生ぶってる」「細かいことでキレル」「あいさつを嫌々する」・・・どんな点で?)

全体としては「事後指導」に対して肯定的な反応をしているが、「ショック」を受けたことを率直に書いている。とくに、子どもの声で自分について書かれたと思われるものを発見して、それを気にしているのである。プログラムを設計する立場としては、こうした「真面目な」反応をする学生がいることを考慮する必要がある。ただし、子どもたちに「具体的なイメージ」を書くことを要求するのは、きわめて困難だと言わざるを得ない。また、実習生個人について指名で評価を求めることは、仮に可能であってもすべきではない。それが教育的配慮というものである。むしろ、「抽象的な表現」から自分の行動や態度で思い当たることはないかを振り返る力を身につけることが「事後指導」の目的そのものなのである。

24. 子どもの本音をみて、子どもは授業を100%受け身ではなく、積極的に学ぼうという姿勢を持っているということが実感できた。また、頑張った分だけ子どもは返してくれるということや、逆にちょっとした不注意でも子どもたちはよく見て覚えていると言うことを知った。前半の自己紹介では「相手のことを知る」と言うこと「自分のことを知る」と言うこと、「自分のイメージを知る」ということができて楽しく活動ができた。人間関係を広げていくのに今日の活動はとても参考になった。

子どもに対する視点の転換は教育実習にとって重要な目標のひとつである。熊本大学教育学部では、過去に附属学校で4週間にわたって教育実習を行っていたことがある。実習開始時には、実習生は子どもに対してプラスの感情を持っていることが多い。しかしながら、時間の経過とともに厳しい評価に変わっていく。最初の期待と違って、子どもたちがさまざまな反応を示すからである。それも、どちらかといえば、自分たちの思い通りにならない側面が目につくようになるのだ。しかし、それも実習の進行に伴って、再びプラスに回帰していく。こうした子供観の変化が実習生を育てて行くのである(吉田・佐藤、1991)。現在では、附属での連続した実習期間は短くなっているが、こうした児童・生徒の生の声が、子どもの「積極性」に気づかせるといった効果をもたらしているのである。

25. 初めて会った人とグループになり、意見をまとめていくという作業は久しぶりで、とても楽しかった。附属小での副実習の時の子どもの声が遊んでくれてありがとうというものが多く、子どもにとっては良き遊び相

手だったということを感じた。しかし、他の学年、中学生を見てみると、実習生に対する不満や要望が多かった。厳しく指導してほしい。発表の時にあててほしいと言う子どもの立場からでないといけない意見がわかって良かったと思った。また附属中での掃除の指導については何と声をかけていいのか全くわからなかった。2週間だけの「先生」である実習生を生徒は先生とみてなくて、立場も微妙だと思った。今日は丸一日講座があるということで、とてもきつくてずっと話を聞くのかなと思っていたが、グループでの活動が多く附属小の子どもの声も聞けて考えさせられることも多かったので、とても勉強になったと思う。

実習内容から逸れるが、参加者の声には「一日中、話を聞く」という予想をしていたと思われる者が少なくない。事後指導は必修だから「仕方がない」と覚悟して来ている訳である。そうした予想からすれば、その内容はいい意味で予想を裏切るものだった。ディスカッションあり、児童・生徒の生の声ありという具合なのである。この種の試みを実践していると、こうした肯定的な「期待はずれ」効果は無視できないほど大きいことを感じる。これとは対照的に、当初から期待が大きいと、それがはずれたときのマイナスの影響もかなり大きくなる。もちろん、事前に掲示する情報にはその内容の概略は書いている。しかし、学生たちはこうしたものを十分に読んでいないのかもしれない。その点では、情報提示の仕方に問題がある可能性も否定できない。また、こうした「期待はずれ効果」も見込むのであれば、「適度な」情報提示の在り方も検討する必要がある。

ま と め

本研究では、熊本大学教育学部4年生を対象にした事後指導「グループワーク」参加者たちの自由記述を分析した。とくに内容の分類は行わず、25名の回答を取り上げた。すでに30名の回答について分析を行っており(吉田, 2004)、合わせると55名のデータを見たことになる。いずれも、参加した「グループ・ワーク」を評価するものばかりである。担当教師に提出することを前提にしているため、若干のバイアスはかかっていると思われる。しかし、そうした条件を考慮しても、「グループ・ワーク」の体験が肯定的に受け止められていることは間違いない。その他の記述にも、マイナス反応はまったく見られなかった。こうしたことから、事後指導としての「グループワーク」が参加者に望ましい影響を与えていることが明らかになった。今後さらに、残された記述について分析を進めていきたい。

引用文献

- 吉田道雄 (1992). 教育実習におけるグループ・ワーク導入の試み. 熊本大学教育実践研究, 9, 127-136.
- 吉田道雄・吉山尚裕 (1997). グループ・ワークを用いた教育実習事前指導の効果. 熊本大学教育学部紀要 (人文科学), 46, 343-350.
- 吉田道雄 (2001). ほめること, ほめられること. 税大通信 2001.8月号. (ホームページ <http://www.educ.kumamoto-u.ac.jp/~yoshida/> の「講演・評論・随想」欄に所収)
- 吉田道雄・吉山尚裕 (2001). グループ・ワークを用いた教育実習事後指導プログラムの開発. 熊本大学教育実践研究, 18, 7-14.
- 吉田道雄・吉山尚裕 (2002). グループ・ワークによる教育実習事後指導プログラムの開発. -実習生は、子どもの声をどう受けとめたのか?- 熊本大学教育実践研究, 19, 133-143.
- 吉田道雄 (2004). 教育実習事後指導に対する参加者の評価 (1). -自由記述によるグループ・ワークの効果分析-. 熊本大学教育実践研究, 21, 103-112.
- 吉田道雄・佐藤静一 (1991). 教育実習生の児童に対する認知の変化: 実習前, 実習中, 実習後の「子ども観」の変化. 日本教育工学雑誌, 15 (2), 93-99.